

【書評】

ルネ・レモン著『政教分離を問いなおす——EUとムスリムのはざままで』（工藤庸子＋伊達聖伸 訳・解説）

青土社、2010年

René Rémond, *L'Invention de la laïcité française: De 1789 à demain*, Bayard Editions, 2005.

飯 笹 佐 代 子

IIZASA Sayoko

欧州では近年、イスラームの可視化をめぐって社会が騒然としている。以前からムスリム女性のスカーフ着用をめぐって論議が起こってきたフランスでは、2004年に、スカーフをはじめ「特段に目立つ宗教的シンボル」の公立学校での着用が法律で禁止された。法制化の背景には、革命を経て共和主義のもと、厳格な政教分離が国是とされてきたことがある。今年に入ってから、公的な場でのブルカ（顔と全身をすっぽり覆うベール）着用の禁止に向けた動きが、フランスだけでなくベルギーやスペインなどでも活発化している。一方、スイスでは昨年、国民投票によって、ミナレット（イスラーム寺院の尖塔）の新規建設を禁止するために憲法を改正する案が承認された。

こうした事態に対する見方は、「政教分離を達成した現代ヨーロッパ」対「政教分離を認めないイスラーム」という対立の図式に基づいているのが一般的であろう。そこにはまた、「男女平等の進んだヨーロッパ社会」対「女性が抑圧されたイスラーム社会」といったジェンダー観も内包される。しかし、このような図式に囚われている限り、せいぜいハンチントンの「文明の衝突論」に加担するだけで、建設的な展望を見出すのは難しいのではないだろうか。

そうした紋切り型の図式による思考停止状態から抜け出させてくれるのが、標題の書である。フランス的な政教分離のあり方、すなわち「ライシテ」をめぐる200年にわたる歴史的展開を丹念に辿りつつ、政教分離のあり方を改めて問いなおしていく。それを通じて、イスラームとの共存の模索に向けて新たな地平が拓かれていくのだ。

フランスの代表的な歴史学者であり政治学者でもあるルネ・レモン氏が、

原著を公表したのは 2005 年。1905 年の画期的な「政教分離法」から 100 年という節目であること、また 2003 年から大きな論争に発展した「スカーフ論争」に触発されて著した啓蒙書であるという。それにしても、「政教分離法」が制定された 100 年前と現在との隔たりはなんと大きいのであろうか。1905 年当時の共和主義者たちは、「国民のアイデンティティとカトリシズムとの離婚」（本文 36 頁）の宣言を同法の制定に込めた。一方、現在問われているのは、フランス国内におけるイスラームの台頭を背景に、「いかにしてムスリムをネイションに統合すべきか」（同上）という課題である。

本書の内容に入る前に、訳者である工藤庸子氏と伊達聖伸氏の解説を手掛かりに、ルネ・レモン氏の立ち位置について触れておこう。彼はれっきとしたカトリックの知識人である。とはいえ、決して反共和主義でも反「ライシテ」でもない。工藤氏が強調するように、彼が異を唱えているのは、「政教分離を推進する左派とカトリック的な右派、進歩と反動、革命と保守」という単純な二元論的歴史叙述に対してである（まえがき 14 頁）。実際に、政教分離をめぐる歴史的経緯は、多様なポリティクスにも彩られた、二元論には収まりきれないきわめて複雑なものである。

レモン氏は、シラク大統領がスカーフ問題を受けて 2003 年に招集したスタジ委員会のメンバーでもあった。この委員会は「ライシテ」の現代的な運用に関して幅広い提言を出したにもかかわらず、その中で唯一採用され、法制化にいたったのが「スカーフ禁止」の提言であった。このことは、レモン氏を失望させたという。彼はもともと、その法制化に対しても慎重な立場であった。

さて、フランスの「ライシテ」とは、200 年という歴史的経験を踏まえて、紆余曲折を経ながら徐々に国民的コンセンサスを得てきた概念である。これまで「ライシテ」について一面的な浅い知識しか持たなかった評者は、頁を開いた途端にその議論の深みに引きこまれていった。ここで正直に言えば、翻訳文中の的確な訳注と、訳者たちによる充実した解説の助けがなければ、レモン氏が鮮やかに描き出すその複雑かつ壮大な歴史をどこまで理解できたか、甚だ心もとない。先述した「スタジ委員会」や、「コンコルダート」、関連の法律などを取り上げた伊達氏による「フランスのライシテの歴史を読み解くためのキーワード」は、専門外の読者にとって実に丁寧かつ気配りの行

き届いた用語解説となっている。

さらに工藤氏による訳者解説「さまざまな政教分離——カトリック／プロテスタント／ムスリム」は、レモン氏の著作をグローバルな歴史軸と空間軸の中に位置づけなおしつつ、欧州と新大陸での政教分離や多文化主義のあり様の相違について説得的な見取り図を提示している。その中で特に注目されているのが、後述するようにケベックの事例であり、本書を『ケベック研究』誌で取り上げる意義もそこにある。

このように趣向の凝らされた編み方は、記者たちの「フランス人のための啓蒙書を日本版の啓蒙書にヴァージョンアップさせる」（まえがき 16 頁）という狙いをみごとに成功させている（敢えて 1 つだけ欲を言わせてもらえれば、巻末に索引があればより良かったのだが）。日本では学術研究にとどまるような内容を、一般読者に「開いて」いこうとする研究者としての真摯な情熱に、感銘と尊敬の念を禁じえない。

本書のおかげで、フランスや宗教問題については門外漢である評者も大いに触発され、様々な課題について、あらためて考えさせられる貴重な機会を得た。

第 1 に、「ライシテ」概念が持つ本来の柔軟性と、その可能性についてである。評者自身、イスラームの本質化には注意を払いながらも、無意識のうちに「ライシテ」をこそ教条的なものとして本質化してこなかったか。しかし、それは理念と実践（現実）とのせめぎ合いの中で国家と教会が歩み寄りつつ、同時に社会の変化に応答しながら構築されてきたものである。1905 年の「政教分離法」にしても、礼拝の自由を保障するために聖職者の活動を存続させる配慮がなされていた。原著タイトルがまさしく示すように、「ライシテ」は 1789 年からこの方、さらには未来に向けて、常に進行形の創造の過程にあるのだ。そうであるならば、現在の膠着状態を脱して「ライシテ」とイスラームが折り合いをつける余地はあるということになる。そして何より、そうした「ライシテ」の未来をもっとも熱心に希求しているのが、レモン氏自身であるといえるだろう。

第 2 に、イスラームの政教一元論を慎重に吟味する必要についてである。もともとイスラームは、あらゆる権力は世俗的なものであるという理解に立っている、との主張もある（訳者解説 304 頁）。イスラーム信仰は、それぞれの地に固有の政治的伝統や法体系と折り合いをつけながら平和共存を模索してきたのであり、その意味では、例外はあっても、ある種の「世俗化」を

進行させてきたということもできる（同 305 頁）。他方で、キリスト教においても政教一元論的な要素が存在してきたことを無視することはできない。現に、今日のヴァチカン市国が行っているのは、一元的な「神権政治」（同 307 頁）に他ならないだろう。

これらに加えて、本書には「宗教復興」ないしは「宗教回帰」と称される現象がイスラームだけではなくキリスト教を含む他の宗教でも同時進行していること、また、「ムスリム共同体」という名称によって多様な人びとを一括りにしてしまうことの問題性（カトリック的な共同体も然り）など、政教分離を問いなおす上で再考すべき重要かつ基本的な論点がいくつも提示されている。

ところで、ケベックにおいてもスカーフ問題は存在する。つい数年前には、イスラームやユダヤを始めとする宗教的慣行をどこまで容認すべきかをめぐって、ケベック社会を沸騰させる論争が起こったばかりである。事態の深刻化を受けて、2007 年 2 月には「文化的差異に係る調整の実践に関する諮問委員会（Commission de consultation sur les pratiques d'accommodement reliées aux différences culturelles）」（通称「ブシャール＝テイラー委員会」）が発足。社会学者のジェラルド・ブシャールと政治哲学者のチャールズ・テイラーを共同委員長とする同委員会は、翌年に報告書を公表した。そこでは、ケベック独自の「インターカルチュラリズム」のあり方を含め、宗教的な要求に対して関係者間の協議によって図られてきた「妥当なる調整」（*accommodements raisonnables*）の意義、「開かれたライシテ」のもとでの学校におけるスカーフ着用の容認などが再確認されている。

特筆すべきは、こうしたフランスとは異なるケベック的解決への模索が、フランス側から注目され始めていることである。すでにスタジ報告では、ケベックの「インターカルチュラリズム」や「妥当なる調整」などが言及されている。フランス側からのケベックへの眼差しに関心のある向きには、「スタジ委員会」のメンバーであったジャン・ボベロ氏が、折しもケベック滞在中に「ブシャール＝テイラー委員会」の活動をつぶさに観察して綴った著作を薦めたい。そのタイトルは、*Une Laïcité interculturelle: Le Québec, avenir de la France?*（直訳すると、インターカルチュラルなライシテ——ケベックはフランスの未来？）という、きわめて興味深いものである。

さらに工藤庸子氏が着目するのは、「アングロサクソン＝プロテスタント

系の統治システムとフランス＝カトリック系との伝統とが、歴史的に共存あるいは競合し、今日なお、たがいにせめぎあう」（訳者解説 296 頁）場としての特殊性がもたらす、ケベック研究に秘められた大きな可能性である。こうした刺激的な問いかけに、わたしたちはいかに応答していくことができるのか。本書は、ケベック研究の展開にとっても貴重な「啓蒙の書」である。

（いいざさ さよこ 東北文化学園大学准教授）